# 日華連会報

中曾根康弘書

## 第129号

## 華道大学

海老原露巌先生

会場風景


一般社団法人日本華道連盟

東京都新宿区百人町2-18-20　☎03-3369-3769

発行人　塚　越　応　鐘

編集人　渡　邊　華　凰

# 生け花と健康寿命

一般社団法人 日本華道連盟
理事長　塚　越　応　鐘

初春のお慶びを申し上げます。

一九六八年に発足した日本華道連盟は来年五十周年という大きな節目を迎えます。連綿と時を重ねることはたやすいことですが、それを熟成させ、つないでいくことは、時代の風潮とも相まって困難なことが多いものです。一流派ではできないことをお互い手を取り合って成し得ることが連盟の神髄と考えます。今年も日華展をはじめ様々な行事がございますが、どうぞよろしくお願いいたします。

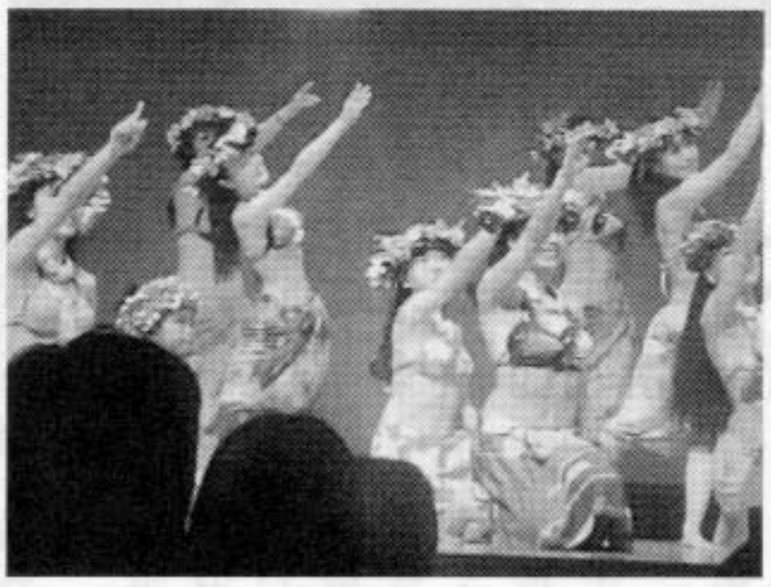
文化活動において、若者の参加が少ないことはどの分野にも共通する悩みです。それを象徴するような事柄を述べてみます。長寿国日本と言われて久しいですが、現在危惧されていることは、いわゆる健康寿命と実際の平均寿命との差が約十才あるということです。健康上の問題がなく日常生活を普通に送れる状態であることが健康寿命、いくら平均寿命が伸びても、晩年は寝たきりという社会を、私たちは望んでいません。

私の地元の話で恐縮ですが、群馬県の女性の健康寿命は静岡県に次いで二位だそうです。静岡県の一位の要因は緑茶にあるといわれておりますが、群馬県のそれは文化活動なのだそうです。文化団体の数の多さと加盟者のそれは他県では見られないほど活発であり、充実したものなのです。私も文化協会会長として多くの文化祭を見学し、それを実感しております。確かにどこの市町村でも大勢の人たちが舞台部門、展示部門で活躍されており、その七割以上が女性です。このような趣味の多様化はいけばな界に少なからず影響を与えています。ある文化祭では出演団体数が五十六の内、十一がフラダンスのグループであったことに、習い事にも流行があるのかと驚かされました。

フラダンスのグループ

私たち華道に置ける状況はどうでしょうか。先輩たちは皆さん長寿であり、しかも生涯現役で活躍されております。仕事を続けることが健康寿命を延ばす必須条件と言われる中、華道は手先を使い、作品をいけ上げるといった適度の緊張感と責任感を伴うことなどが、いつまでも健康でいられる要因でしょうか。

異なった角度から改めていけばなの良さを見出し広めることが出来たらよいのですが…。



タヒチアンダンスのグループ

# 平成28年度 幹部会並びに華道大学講座

## 平成28年7月24日(日)　浅草ビューホテル

### 幹部会―吾妻の間―

午前十時三十分から、長田華鳳事務局長の司会・進行で、出席者三四名で幹部会が開催された。

武井美恵副理事長の開会のことばに続き、塚越応鐘理事長から、「きょうは朝から涼しく、過去では最高に良い日になりました。

昨年の華道大学は、大変なハプニングがありましたが、リベンジで海老原露巌先生に、今年もう一度やっていただくことになりました。先生、たいへんな張り切りようです。それと今回は、京都大学教授の土佐先生による、映像とお話があります。楽しみにしていただきたいと思います。それでは、限られた時間ですが建設的なご意見よろしくお願いいたします。」と挨拶があり、定款により理事長議長のもと議事に入った。

議事項目

一、二〇一七第十二回時代を彩るいけばな百花繚乱展について　…塚越応鐘理事長

二、第三十一回国民文化祭・愛知二〇一六　第三十二回国民文化祭・奈良二〇一七について　…塚越応鐘理事長

三、平成二十九年度事業計画案について　…岡野闘華齋企画部長

四、その他

(日華連ホームページアドレス http://www.nikkaren.sakura.ne.jp)

(日華連メールアドレス nikkaren@nikkaren.sakura.ne.jp)

五、質疑応答

一、昨年同様の場所、時期になると思います。

現在の会員数で、あれだけの広い会場を埋める事は大変です。流派の協力で回っていますが、次回も皆さんのたくさんの参加をお願いいたします。

二、国民文化祭は、第一回東京から参加してきました。文化庁の方針が五年前位から変わり、地元の受け入れ体制が大変になりました。今まで通り、中央からのウェルカムがなくなったため、今回は不参加となります。

これでは、国民文化祭ではなく県民文化祭です。スポーツで、国体があるように、文化の国体として、昭和六十一年に始まりました。全都道府県を回る事ができるかと思っていましたがまだ参加していない所は、北海道、青森、宮城、福島、新潟、長野、神奈川、滋賀、大阪、和歌山、島根、高知、長崎、佐賀、宮崎、沖縄です。

国内旅行は、国民文化祭の参加なしでは難しいです。以前に幹部会を兼ね、群馬県の榛名方面の国内旅行をしました。また一泊くらいで行ける所があれば計画したいと思います。

三、平成29年度　事業計画案

・第1回理事会　1月9日(月・祝)
・第2回理事会　12月18日(月)
・総会並びに新年会　1月15日(日)
・華道展説明会　2月20日(月)
・第12回時代を彩るいけばな百花繚乱展　4月7日(金)～4月10日(月)
・幹部会並びに華道大学講座　7月23日(日)
・第32回国民文化祭・奈良2017　不参加
・研修旅行　未定
・本部役員会（6回）1月～12月
・日華連会報第130号発行　秋頃の予定

四、県、市、個人の活動等、ご遠慮なく、お送りください。

封書でも結構です。

五、特になし

最後に、議長総括があり、渡邉華鳳副理事長の閉会のことばで会は終了した。

◀本部役員

▶幹部会

## 華道大学講座 ―祥雲の間―

平成二十八年七月二十四日(日)浅草ビューホテル三階「祥雲の間」で午後一時～二時三〇分にわたり華道大学講座が開催されました。

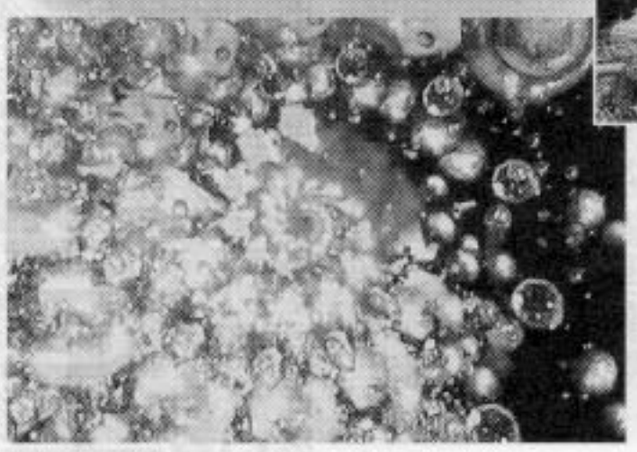
開講のことばは武井美恵副理事長により「これからの催しを満喫して下さい。書の素晴らしいパフォーマンスをお楽しみいただきたい。」との挨拶がありスタートしました。

塚越理事長の挨拶では「皆様こんにちは。今日は良い天候に恵まれました。今日の催しでは、昨年火災により充分に出来なかったパフォーマンスを再度行うことになり、先生は更に一年の準備をして今日の日となりました。どうぞ時間の許す限り楽しんでいただきたいと思います」とありました。

司会は原元美紀レポーター（テレビ朝日「モーニングバード」）です。出演者は書道家、墨アーティストの海老原露巌先生と京都大学高等教育研究開発推進センター教授の土佐尚子先生です。

土佐氏は五感で楽しむアートの世界をトークと共に映像により紹介。様々な面から芸術と文化に触れると言うことを主軸にしてお話ししして下さいました。破壊による創造は経済分野でよく使われ、一流の人は破壊をする。伝統は壊して今の時代に合わせる。姿を変えて継続していく、といった内容を解り易く花の世界から解説されました。

華道大学講座の様子

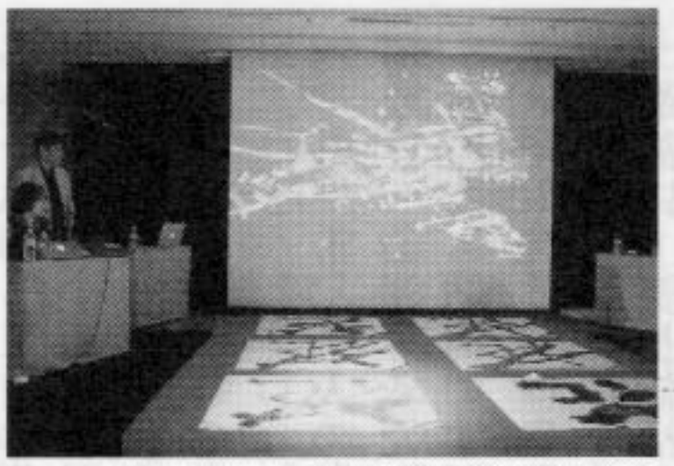


平家物語は琵琶の音により紹介され、映像の美学に魅せられました。転図の美学、百倍に引き伸ばして見える世界、自然の中にある知らない美しさ、自然現象、花弁の散る美しさ、シュールレアリズム、目に見えない心の中の表現、耳なし芳一の心境、思い出していることを描きたい、呼吸の高低、ききょうや萩等美しい花の破壊など、様々な美しい画面がくり広げられました。

観世流の世界、禅の発生、心像表現、わび、さびに至るまで、見ている者にとって本当に目新しい世界でした。

書の海老原先生は書の歴史を語ってくださいました。

作り出して壊す。書は中国から発生したものであり、皇帝が変わるたびに書風が変わり、又くり返す。それは日本の美意識に共通しており、文化の遺伝子はインド～中国～日本と連なるアジア文化である。書は王羲之の書がもっとも美しく、書を習う者の基本となる。



海老原先生のパフォーマンス

先生は六枚の紙に大きな筆で実演し、六態の「花」の文字を書いて行きました。書は時代を経るに従って墨の色が変化していき、書をするときは時をつかむリズム、空気を読むこと、体を動かすことを大事にし、これは体験しないと解らないものです。驚いたのは紙に直接書くのではなく、たっぷりの墨を上から落としながら字を書いていたことです。

本当に自然を感じることが出来ました。墨の落ちる美しさ、かすれた部分やたっぷりの墨、まさしく墨の濃淡のたれる自然の美しさ。先生と筆が一体となり呼吸が一体となり、筆が生き物の様に感じられました。書こうとして書くのでなく、あくまでも自然に落ちる墨の美しさ、同じものは二つと出来ない素晴らしさを感じることが出来ました。様々な世界を見せていただき一同も満足し、無事会は終了しました。

役員紹介

# アメリカ生活の思い出

都古流美和会　武井美睦

都古流美和会家元（日華連副理事長）のもと、日華連では本部役員（広報担当）として活動させていただいております。

ひととおり、今号で本部役員紹介コーナーが終了いたします。

来年度からは、年一回の発行でカラー版になる予定ですので、皆様には振るって、お華の写真等々ご投稿いただきますよう、お願い申し上げます。

さて、私事となり恐縮ですが、今から三十数年前の夏、主人の米国留学に付き添い、二年間海外生活を経験いたしました。

米国東海岸メリーランド州ボルチモア市の空港に降り立った時の気温は、なんと四十度！いきなりの自然の猛威に驚かされました。

住まいは木立の綺麗な郊外のアパートを借りました。夏の庭には、無数の蛍が飛び交い、秋には紅葉の林の中をリスが走り回っていました。冬は零下二十度にもなりましたが、どの家も暖房設備は完璧で苦労は感じませんでした。

しかし、何といっても春の素晴らしさは、日本ではあまり見る事のできないものでした。寒さが和らぐと一気に芽吹き、辺り一面にドッグウッド（ハナミズキ）が咲き誇ります。帰国後もハナミズキを見ると当時の可憐な花を思い出します。

主人の研究所の仲間（世界各国出身）の方々をお招きして、何度かホームパーティーをしました。現地の材料で日本料理のまがい物しかできませんでしたが、それでも「天ぷら」「ちらし寿司」は、好評でした。ボルチモアは港町のため海産物が手に入り、メリーランドクラブ（渡り蟹）やロブスターを魚市場で「バーレル（樽）買い」して、山のようにテーブルに積み上げ食べるという貴重な経験もしました。港近くには胡椒で有名なマコーミックの工場があり、蟹に振り掛ける独特の香辛料の香りは忘れられません。

たまたま、日系アメリカ人のお華の先生に巡り合い、教室にも通いました。一度だけですが、ダウンタウンのコンベンションセンターで「いけ華展」も体験しました。思うような花材がなく、菊とアオキだけの作品でしたが、日本を想い心を込めて生けました。関心を持たれたアメリカ人も多く盛況でした。生け花向きに多くの種類の花を手に入れる事は困難でしたがそれなりに工夫できるものです。美しい花を愛でる心は、万国共通です。公園や植物園には、華やかな花が数多く植えられていて、日本では味わえないスケールの大きさです。フィラデルフィアのロングウッドガーデンは、夢のように美しい植物園で、丈の長いデルフィニウムやルピナス、トルコキキョウは見事でした。バージニアの山が黄色に染まる頃、フロリダ方面へ車で南下するに連れ、季節が一日で秋から夏へ逆転していく様は大陸の広大さをまざまざと見せつけられました。

大好きな美術館へも、たびたび出掛けました。東京のように人混みに遭遇することもなく、ワシントンの国立美術館では、絵の前で普通に写真を撮ったり、子供達が写生をしたり、演奏会があったりと日常に溶けこんでいました。ニューヨークの近代美術館では、ピカソの有名なゲルニカが囲いもなく当たり前に展示してあったのには驚きました。その後スペインに返還された事を後で知りました。映画のロッキーの舞台となったフィラデルフィア美術館前の大通りの紅葉は目眩いほどに美しく輝いていました。

それから、何といっても大きな出来事としては、長女を出産した事です。何もわからず不安ばかりでしたが、無事に健康な子が産まれた時は、安堵のおもいと感謝の気持ちで一杯でした。諏訪大社からの命名書を送って頂き、着物姿で「形だけのお宮参り」をしたり「お食い初め」もして、我が子の成長を祈りました。

短い期間でしたが、海外生活をしてみると、日本の素晴らしさがたくさん見えてきます。

日本の伝統文化は、どこの地に行っても忘れる事はできません。そして受け継がれていくものです。

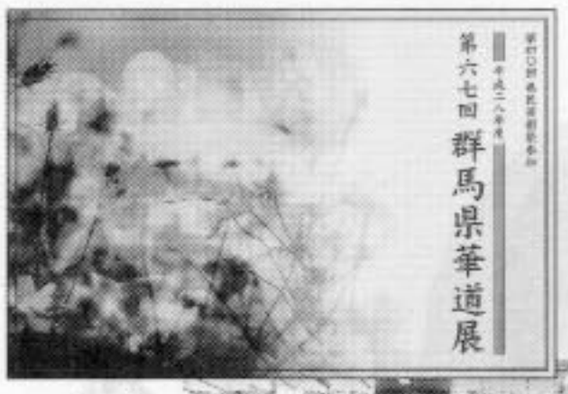
これからの益々の日本華道連盟の発展を願ってやみません。

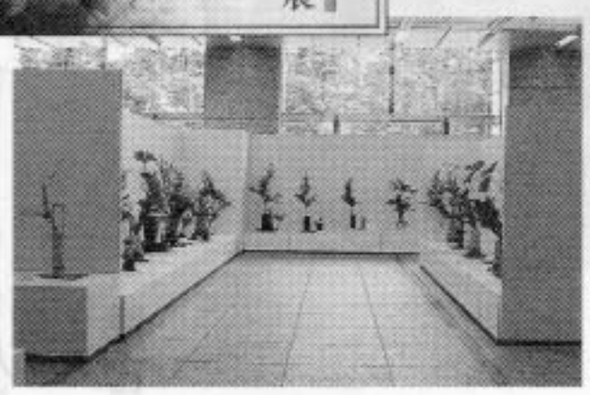
# 各地各流

## 第40回県民芸術祭参加

## 第67回 群馬県華道展

第四十回県民芸術祭参加、第六十七回群馬県華道展が、平成二十八年十月十四日(金)～十七日(月)まで群馬県庁県民ホールにて、前期、後期二日ずつで四日間、三十二流派二六〇名参加で開催されました。今年は昨年と異なり入口近くに格花コーナーが設営され、来場者にはいつもとひと味違った雰囲気を味わっていただきました。



▶入り口を格花とし雰囲気を一新

◀県庁県民ホールには連日多数の観客が

日華連所属の参加流派
いけばな松風　湖秀流
遠州秀月流　遠州古流和松会
松月堂古流闘華　東華古流

## 藤沢華道協会創立70周年記念
## 春のいけばな諸流展

藤沢市文化団体連合会会長
長田　華鳳

四月二十一日～二十六日、さいか屋藤沢店にて開催された。出瓶数は前後期併せて二〇〇杯を数えた。連日多くの方々が訪れ、入場者は六日間で八千人を超えた。会員の出瓶は次の通りである。

長田華鳳、大澤一煌、上原瑞光、長田藍秀、松田嘉秀、柳沼初鳳

長田華鳳先生作品

## 藤沢華道協会
## 創立七十周年記念
## 祝賀会

長田　華鳳

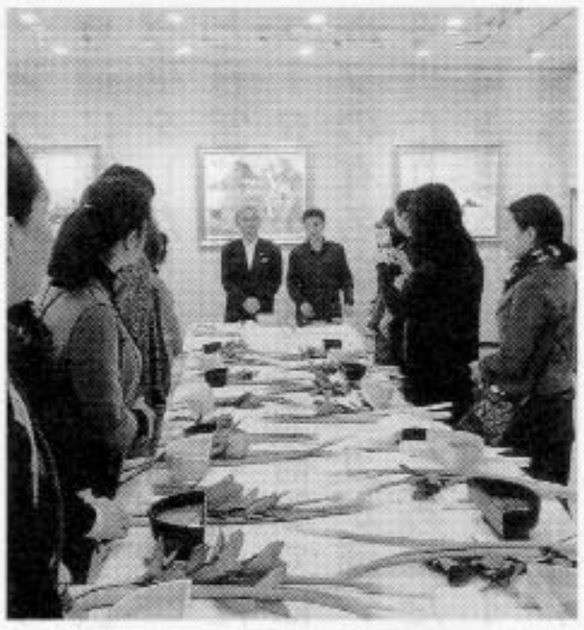
四月二十四日、藤沢市民会館にて、鈴木藤沢市長・佐藤藤沢市議会議長・吉田教育長・役（えん）神奈川県華道連盟理事長・石井藤沢市みらい創造財団理事長をはじめ各界から多くの来賓を集め盛大に催された。長田華鳳会長は、これからの華道界はいかに行政との二人三脚をどうとるかでその発展性が決まる。現在、藤沢市との連携事業は多岐にわたり、次世代育成に大きく貢献をしている。これをどこまで続けるかは大きな鍵となる。という話を感謝の意を込めて話した。功労者表彰の後、塚越日華連理事長からの祝電も披露された。

長田華鳳先生あいさつ

## 藤沢・昆明友好姉妹都市
## 提携三十五周年記念
## 文化訪問

長田　華鳳

中国昆明と姉妹都市を結ぶ藤沢市は、五年毎に昆明で文化交流展を開催している。今回も五年前と同様、長田華鳳を団長として華道・茶道・吟詠の代表一六名に二〇〇点に及ぶ作品を携えて訪中した。公式式典では前回同様いけばなパフォーマンスに大喝采を受け、その後の展覧会・市民交流と連日過密な日程ながら、華道には二〇〇名を超える体験希望者が殺到し、忙しいながら充実した交流ができた。藤沢市と昆明の交流は、昆明出身で現在の中国国歌「人民行進曲」の作曲者・聶耳（ニーアル）氏が藤沢での海難事故で命を落としたことによることが発端である。



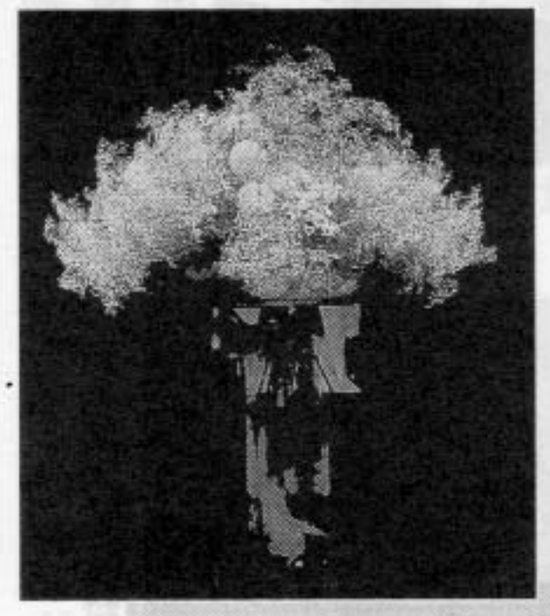
藤沢・昆明友誼館にて
いけばな市民交流

▶会場入り口の様子

## いけばな松風95周年記念華展

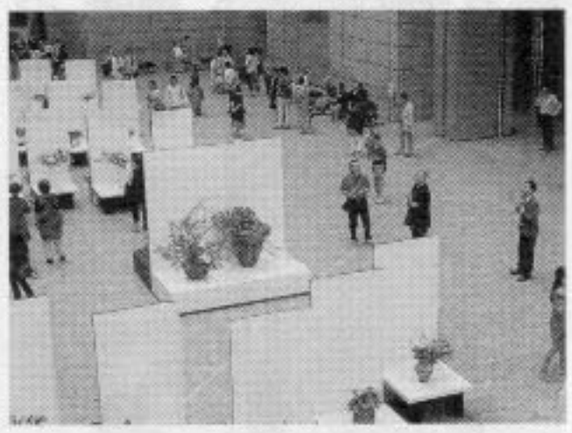
# 満つる頃

平成28年９月11日(日)・12日(月)
新宿パークタワー(アトリウム)

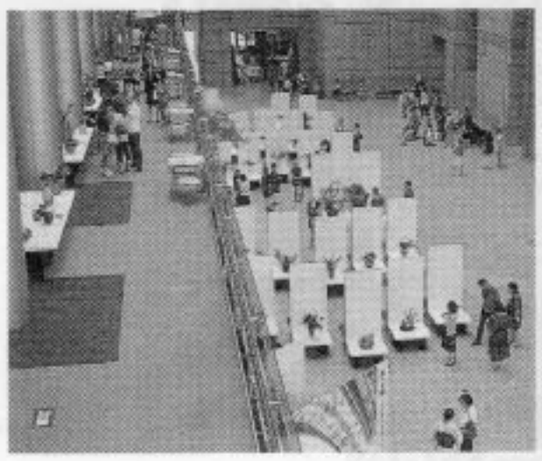


◀家元 塚越応鍾先生作品

▲あげ花前に笑顔で集合写真



▶アトリウム1階はオープンスペースで



◀2階は株式会社ヘルモーイの輸入花器とのコラボレーション

◀副家元 塚越応駿先生作品

## いけばな松風95周年記念華展を拝見して

翠月古流　海野　華幸

九十五周年記念華展おめでとうございます。今年は猛暑で当日もまだまだ九月とはいえ残暑厳しき折、会場入口で色鮮やかな美しいパネルに迎えられ、通り抜けると、正反対の黒のバックのパネルに家元作品がありました。古典と現代を融合させた花器に、真の花材の添えとして生ける事が多いカスミ草を主役に生けた作品が、暑さも、又汗もスーッとひいていくような清涼感いっぱいで、会場に来場していた幼い子供さんの「ワーこの花すごい。お母さんこれ何の花？」という大きな声が会場に響いていました。無心な子供の心を動かす力があるんだなと私も深く感銘し、何か心和む素晴らしい華展会場を後にした一日でした。

他の作品もそれぞれに珍しい花材、花器に生けた力作に、自分もこれから頑張ろうと元気になりました。

いけばな松風流の益々の御発展を心より御祈念申し上げます。ありがとうございました。

# 第65回 静岡県華道展

翌月古流　勝又　華玲

平成二十八年十一月二十三日～二十八日、静岡県沼津キラメッセぬまづ（プラザヴェルデ内）にて開催されました。三部構成で二日間ずつ作品を入れ替え二七三点出品いたしました。中には、若手による三人席や人気投票によるコンテストにも出品いたしました。二十五日の生け替え日には五十四年ぶりの雪が降り、御殿場では積雪九センチほど。そんな中でも平常に撤花、生け込みをし、日頃お花を生けるだけではなく、精神的にも鍛えられていることを実感いたしました。

三位入賞　大村華容先生作品

小塚華征先生作品

伝統の枝、秋の深まりを表現した作品に多くの来場者でにぎわっておりました。

また、大村華容が生花コンテストに三位で入賞しました。

海野華幸先生作品

# 昔人（むかしびと）のうたげ　百人一首を生ける

翌月古流家元相談役　田代　華晴

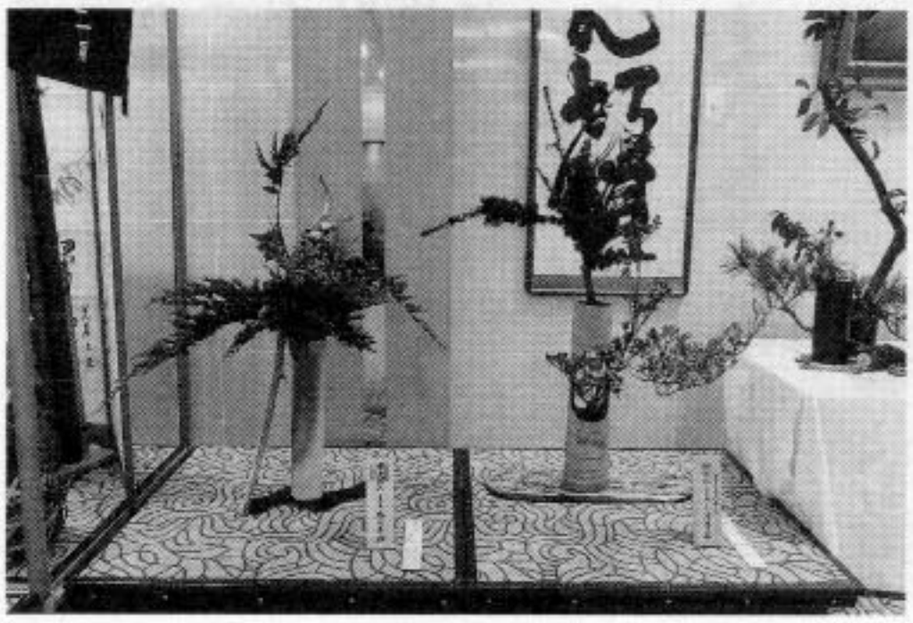
昨年は、翌月古流七十周年、翌月学園五十周年と節目の年でしたが今年は気持ちを新たに第五十一回翌月学年祭を九月十八日・十九日、御殿場高原ホテル時之栖の新しい、富士の間をお借りして、この一年間の精進の成果を発表いたしました。書道部の皆様が書いてさった百人一首の歌に合わせていけました。始めはどうなる事か心配でしたが段々のめり込み、書生けで生けるつもりが、どうしも歌に合わないので投入にした枯言われるベテランの先生。又こるはし歌は、恋の歌なので真ん中に真では赤な花を入れたいとか、この恋つの人目をさけなければならないのとて、すこし黒っぽい赤にしようか立ら、「住の江」の海岸は、今で生コンクリートで海河になってい下そうだけど、昔の岸辺だからと木を見つけて来たりと、楽しいけ込みとなりました。華道展、道展、茶席、アールド翌月、盛だくさんの学園祭でした。昨年続き衆議院議員の細野先生も生込みにかけつけて下さり、力強作品を出瓶して頂きました。日

▲細野豪志先生と家元

華連の先生方も、遠方にもかかわらず御出席下さいましてありがとうございました。紙面をお借りして御礼申し上げます。

▲家元 渡邉華凰先生、家元補佐 渡邉華嘉先生、師範 秋元華幸先生作品

▼外山華和先生作品(左)、田代華晴先生作品(右)



●茶花 生け花 文化のおはなし いなほのしづく●

# 細竹の花入れに、ナデシコの花にススキを添えて

いけはな研究家・華道洗心雲林派
米村孝月

いけ花とも云。なげいれ抔（など）と云う心は、しやんと生る事なり。
亭主の心入を見する。はづかしき物也
惣、茶湯方生花は、立花の心得とは違ふものと心得生けたり

と書入れがありました。この文章によって、現在「抛入花（なげいれは）」と呼ばれている形式の生け花は、当時は、ただ単に「いけばな」とも呼ばれていたことが分かります。それだけでなく、茶の湯の席に生けられた生け花は、立花と呼ばれ床の間に生けられた生け花と、心得が異なるものであったことが分かります。

ここに載せた抛入花は、初秋の風に揺られている糸ススキの葉に、ナデシコの花をあしらい、細い竹の器に生けられていました。そこで竹を切ってきて、このような姿に生けようと思えば、誰でも容易く、このような姿に生けることができるかと思います。しかし、このような抛入花を生けるに当たっては、なぜ、そのような姿に生けられてきたのか、その意味を充分に理解した上で生けることが大切だとされてきました。思うに、元禄時代に花師と呼ばれた人たちは、このように生ける意味を理解したうえで生けたと思います。ところが、時代が流れ下っていくうちに、何故、竹の器に、ススキにナデシコの花を取り合わせて生けられてきたのか、その意味が、次第に分からなくなってしまいました。

ところで竹を斬って花器として用いる生け花の芸には、色々の事柄を含んでいますが、その一つに竹の肌の青さを直接見てきたことを、『真揃之口伝』（花道古書集成所収）は次のように伝えていました。

：竹は、竹の青きを本とす。古伝、楽の花には、葉の有るべからず由也

ここにいう「楽の花」の【楽】には、侘び茶の湯を大成した、千利

絵図は『築山山水傳』に載せられていました。同書は『茶の湯独漕』の一部を抜き出して一冊の本として出版したもので、元禄時代からそう下らない時代に出版されたものだと思われます。細い竹を根本付近から切り取って竹の花入れとし、ナデシコにススキの葉をあしらい、掛け花生けとして生けられていました。同書には、

竹之花生　花いけ心の図

休が好んで用いた、楽茶碗の名に通じています。楽茶碗にほどよい温度の湯を注ぎ、茶碗を手の上に載せて抹茶を頂くのですが、その茶碗を両手でもち抱えたとき、掌（てのひら）の中に我が子をはじめて抱いた時のような不思議な温かさが、茶碗の内から伝わってくるものを味わうことができます。そのことを別のことばに直して言えば「気近く」思うことと、同じであるといってよいでしょう。

花の道は、「楽の花」と呼ばれた抛人花を今に伝えています。ここに載せた抛人花がそれにあたります。風に靡くススキの葉を、撫子の花と取り合わせ、竹の器に生けることで、撫子の花は青い竹の器と固く結ばれた姿として表されていました。

「楽の花」とは、「気近く思った」ことがその元になっていました。雨にぬれながら竹に留まっている雀の姿、雪の重みに竹竿が大きく撓んでいる姿、共に、その姿は「うれい」を含んでいます。ここには直接「うれい」の言葉は示されていませんが、花の道の主要な主題である「さび」には「うれい」が含まれていました。そのことを心に思いこの抛入花を観るとき、能阿彌が言った「一大事」の言葉に秘められていた意味が、観る人の心にひしひしと伝わってきます。

主な参考文献　桐壺文庫蔵書
・君台観左右帖記　文明八年（一四七六年）写
・築山山水傳　元禄の頃　刊

（平成二十八年十月号三〇七号茶花 生け花 文化のおはなしいなほのしづくより抜粋。）

## 安らぎの時

松月堂古流闘華　岡野闘華齋

夏の心身の疲れを癒されたいと9月末の一日だけの晴れの日を見つけ、赤城山の西麓に位置する赤城自然園に行って来ました。

ここは約36万坪（一般開園エリアは約18万坪）の土地を、およそ30年の歳月をかけて環境を整え、野山の草花がのびのび育ち、野鳥や虫達が暮らしはじめる本来の姿を大切にして盛りの生態系を維持している所です。

一歩園に入ると、可愛らしいコルチカムが迎えてくれ、自然を生かした路は傾斜も緩やかで、初秋の草花が控えぎみにしながら顔を見せてくれました。渓流の小舟と言われている紅紫色のツリフネソウ、その仲間で、葉の下に隠れるように静かに吊り下がって咲くキツリフネが遠慮深くて愛らしく思いました。ボリューム感のあるオオバショウマ、テンニンソウ、そしてその合間に揺れて咲くシュウメイギク、オミナエシ、フジバカマ、ヒガンバナ、水辺に1本だけすうっと立って心を奪われた紫色のレイジンソウ、そしてシラネセンキュウの白い花のそばで寄り添うようにマツムシソウが淡いブルーやピンクで揺らいで見つめてくれました。マヤトリカブトも根は毒を持ちますが、高貴な紫の衣をまとい、いけばなで用いる花とはだいぶ風情が違い格別なものでした。そしてシャクナゲやツツジの森を進んで行くと、ちらっと赤い色が目に入り、そっと葉を避けると季節はずれのシャクナゲのつぼみが一つ可愛くも寂しげに顔を見せ、思わず「わあ」と歓喜の声をあげてしまいました。まだまだ見落としている草花も多かったのですが、木々の合間から見る空も秋を匂わせ暮れない内にと家路につきました。

この散策でちょっと残念でしたのはこの時期に与那国島まで2000キロ旅をするというアサギマダラの蝶に会えなかった事です。

忙しない日常、普段は足早に通り過ぎる道端も、ゆっくり歩き立ち止まると何かを発見しそれが楽しみに変わっていく。そんなささやかな幸せって良いものですね。

## 編集後記

今年も日華連行事は四月の華展、華道大学も盛会の内に終了し、新たなる年を迎える頃となりました。来年度から会報はカラー版となります。皆様の多数の原稿を心よりお待ち申し上げます。よろしく御願いいたします。

記録広報部　渡邉　華凰

今年は五十四年ぶりに十一月に初雪が降り、毎年の異常気象に驚かされます。今号にもたくさんのご投稿をありがとうございました。来年からは広報紙が年一回カラー版となります。ご期待下さい。

どうぞ皆様には、良き新年をお迎えくださいますようお祈り申し上げます。

記録広報部　武井　美睦